

遊び心

PLAYFUL MIND

大前研一



新潮文庫

あそ
遊

び

ごころ
心

新潮文庫

お - 27 - 4



平成三年四月二十五日 発行
平成五年二月二十日 五刷

著者 大前研一 おおまえけんいち

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 営業部(〇三三三六六一五一一)
編集部(〇三三三六六一五四四〇)

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Ken-ichi Ohmae 1988 Printed in Japan

ISBN4-10-102314-X C0195

新 潮 文 庫

遊 び 心

大 前 研 一 著

新 潮 社 版

4643

はじめに

経営戦略や組織論を書き続け、また最近では貿易問題や国政の問題提起をしていると、世の中には私がよほど真面目な学者風の人間と誤解している人もいるだろう。問題を正面から取りあげ、必死に解決策を考える、という点では真面目なのだが、実は私は仕事一筋、というのからは、ほど遠い遊び人間なのだ。また発想を刺激するためには、バイクなどの乗り物やリゾートでのポケーツとした一時ひとときが大切だ、と信じている。それで年中そういうところに行っているのだ。

そんなことは世間様にとってはどうでもよいプライベートなことなので、今まであまり書いたことはないが、この本はまさに、その個人生活や個人の体験を中心に書いた。実は本書にはちよつとした事始めがある。今から二十五年も前、私が早稲田大学交響楽団でクラリネットを吹いていた頃、木管の五人が集まってバツカス木管五重奏団、というのをつくった。

初代のクラリネットは私より三年先輩の清原さんという人であったが、不幸なことに交通事故で亡なくなられ、私が二代目のクラリネットとして、爾来二十二年にわたってこの連中と

一緒に演奏をしている。友人たちが続々と結婚した今から十五年くらい前には、よく披露宴ひろうえんに招かれて、入場行進から間奏曲まで、一切を受け持つて結構な実入りがあった。これはあらかた飲み代と楽譜代に消えたのであるが、最近是一年一回の出演が精一杯で、皆、腕のほうも下降曲線を描いている。こんなことではいけないと、去年あたりは合宿をして、かなりの成果を上げた。そんな折、私がカナダに別荘を買った話をする、と、連れて行け、と言う。自分だけ良い思いをするのはけしからん、というわけである。

心 遊 び
学研でこの本の編集を担当した福代徹氏は、実はオーケストラの仲間でフルート吹きである。彼がときどき我々の練習時に顔を出し、私に学研からも本を出してくれ、と迫るのである。私は講談社とプレジデント社と決めているのでダメだよ、なんて言っても、バツカスの連中は、昔のよしみで「お前書け」と無責任なことを言う。飲んだときには、「書いてその印税でオレたちをカナダに連れて行け」などと言う。そんなやりとりをしているうちに、「そうか、カナダに行つて合宿すればもつとうまくなるな、なら書いてみようか」という気分になった。

この連中にもわかる内容にしようということで、この本が「わかりやすさをモットー」に生まれたのである。何しろ連中は、私の友人でありながら「お前の本はむずかしすぎる」と一冊も読んでくれないような手合いなのである。読者諸氏には申しわけないことだが、こうした経緯でこの本は生まれ、先述の目的に沿って、印税の何がしかは我々の旅費に寄付して

いただくことになる。

そうはいっても、この本を書こうと決意したからには、初めてのエッセイなので、十分に満足のいく内容にしようと、私は土、日返上でがんばった。また昔の話などについても、古い資料をほじくり返して、それなりに正確さを保つことを心がけた。

エッセイではあるが、一貫したテーマとして、客観的に日本人を見ることにした。世界の誰にも頼まれなくとも日本人であることだけでかなりの自縛自縛にかかっている、ことなどが浮き彫りされるよう試みた。豊かさや本当の自由について考えた。私の発想の原点となる「何でもやれることはやってみよう」という考え方について、実生活からの例をいくつか紹介した。

またこの本は自叙伝ではないが、自分のことだけを書いたつもりだ。他人の話はやめにして、すべて一人称で自分の見たこと、考えたことを中心に書いた。結果としては旅行記、体験ルポルタージュのような趣もある。私とともに読者諸氏が、楽しみながら世界旅行をしているような雰囲気になっただければ幸せである。また機会があれば、是非ご自分で同じような体験をしていただきたい。そのような食欲をつけていただくために、なるべく資料を多用した。

日本人が世界のリーダーとして資金力に相応しい指導力を発揮していくためには、教育やものの考え方、価値観、余暇の過ごし方など、多方面にわたる変革が必要である。私は幸い

にも、今の会社について、平均的な日本の会社人間にはあまり経験できないようなことを十分に見聞させてもらっている。こうしたこと的一端を皆さんに紹介することは、ある意味ではプライバシーの公開となり、心配な点もある。私は大いに楽しんでいます、と宣言しているととられかねない。この日本にあつては、このようなトーンは伝統的にあまり好まれないので、勇気がいることなのだ。

心 び 遊

しかし、だからこそ、交際費の浪費は許されても、人生をエンジョイする経費は許されない暗い社会から、今日日本は脱皮できないでいるのだ。人生はエンジョイするためにある、と私は思う。また家族は、お互いにエンジョイしなくてはならない。私は少なくとも、清貧のようなふりをしながら生きていくことだけはやめよう、と思う。本書はビジネスマンだけでなく、特に母親や若い人にも是非読んでもらいたい。人生をエンジョイするには、金よりもまず、その意志と心がまえが第一だ、また仕事と遊び心は両立しうるのだ、ということ、読者が本書から読み取っていただければ望外の幸せである。

昭和六十二年師走^{しわす} 東京にて

大前研一氏の経済分析や政策提言は、かねてより定評のあるところだ。

世界経済、特に先進国経済が一体になって、金も物も情報も国境を越えて自由に交流し、結び合ってきた今日の二四時間経済を最初に洞察し、貿易摩擦や国際通貨の安定に鋭い新説をだしたのは同氏である。

大前経済学は、今や世界的に定着しつつある。氏の経済観察眼はあくまで冷徹な客観的なものである。鋭い刺身包丁でふぐの毒を避け、一枚一枚ごく薄身に刺身をそいでいくような手法である。

この大前氏の随筆を読んで少々驚いた。この人の真価は澄明な情の人である。氏は、かねてより日本の道路を狭くしている街頭の電柱を撤去すべきであると考えておられたが、その矢先に自転車で剣道の練習に行く途中の奥様が、電柱を避けようとし、おりからきた自動車に竹刀が引っ掛かり路上に投げ出され二週間の傷を負われたことが書かれている。大前経済学の合理主義的筆法からすれば、奥様は竹刀ではなくして、ゴルフのドライバーを持っていたであろう。澄明な情とは、氏の洞察眼がパッションに触発された機鋒鋭い活禅の「氣」によるものだ。自由な遊び心というべきか。

私も水泳、ゴルフ、テニス、禅などを休まずにやった。遊びと仕事は両立する。大前氏の魅力はこれで益々高まることは疑いない。

目 次

1章

自己紹介

はじめに 三

プロローグ 遊び心 一七

お守り 三三

アーカンソー 三七

祖父母 四一

無銭旅行 四六

アレルギー 五一

蚊 五七

車 六〇

カバン 六四

鉛筆 七二

2章

日本人の殻の中で

うどん	七
友人	七
脱サラ祈念日	八
ポジターノ	七
電柱	九〇
サマータイム	九三
朝食	九六
郵便番号	九八
ワイシャツ	一〇一
見栄	一〇三
盲腸	一〇七

遊泳禁止……………一〇九

3章 教育への期待

中華思想……………一六七

スピーカ……………一二三

ああ、日本人……………一二七

貸借関係……………一三四

英語……………一三九

非学歴社会……………一四七

国際化……………一五三

メモリーチップ……………一五七

責任感……………一六〇

4 章 趣味人間・遊び人間

クラリネット	一六七
パラオ	一七〇
アポリーフ	一七三
カサ・デ・カンポス	一七九
馬	一八三
グレニールズ	一八五
メジマグロ	一八九
蓼科	一九四
A T C	一九八
白転車	二〇四
冗句	二〇九

5章 豊かさの落差

モスクワ空港	二一九
新プロレタリアート	二二四
余裕	二二八
アールベルク	二三五
バハカリフォルニア	二三九
コナ・ビレッジ	二四二
リゾート	二四五
エピローグ	二五四

遊

び

心